

## 洋一の鎌倉温泉湯治

鎌倉温泉は、私が物心ついた頃よりあった。生家がある部落より一口位歩く自然豊かな山間にあり、傷、火傷に効くと評判で、近郷・近在からの湯治客が絶えない。

温泉を経営していた人は、私の生家の三軒後ろで農家だった。そこから通つて湯治客の相手をしていたが、私が田舎にいた十五・六才の頃、全員温泉に引越して行つた。

湯治と云えば食料、鍋、釜、寝具まで持ち込み、部屋だけ借りて、直るまで湯に浸かり自炊する事だ。近くの人は通つた。電気が点いていなかったから、ランプ生活、秘境の感じだったろう。

洋一が生まれた翌年だから昭和三十年十月、洋一が軽い火傷をした、私はまだ乗船していた頃の出来事だった。

妻の生家には新ストーブがあつた。ダルマストーブとか云つて瓢箪型をしている。煙突が付いていて、大きい釜を載せご飯を炊いたり、味噌汁を作つたり、餅を焼いたり、食事の用意ができる。

囲炉裏端とも云い、回りに家族全員、腰掛けられる様になっていて、暖房にもなる。一石二丁便利だがウツカリすると危険である。

洋一は生後一年三ヶ月、歩くのが遅かつたが、ハイハイは活発で、妻がチヨット目を放したときに、ストーブの角に頭を接触させてしまった。耳の裏あたり、妻は気が動転、お医者さんに駆けつけ治療してもらつた。

火傷の傷は一生残る事が多い。顔の前面だったら残つたかも知れない、妻は夫や子供に対して一生重荷を背負つ事になる。幸い火傷は耳の裏だった。本当に心配しただろう。

私の父母に勧められ、鎌倉温泉で湯治する事になった。湯治用具一切を持ち込み、約十日間、折からの小学校の運動会や、紅葉見に連れて歩き、ランプ生活を経験、傷も癒え生家に戻つた。

それから間もなく私は下船、妻から聞かされた。洋一は矢附で三十二年三月仙台に引越するまで、親、兄弟に大切にされ幸せ者だった。火傷の痕は残っていないようだ。